



高設栽培のイチゴの
培地にていねいにマ
ルチをかけていく佐
藤博さんと洋子さん



「ままでの村は負けない」の怒りと決意の飯舘村

文＝編集部 写真＝大西暢夫



3月11日、福島県飯舘村では震度6弱の強い地震を感じたが、被害は軽微だった。「屋根瓦が落ちて、軽乗用車のフロントガラスが割れた。お墓も倒れたのでどうしようか。大損害だと話し合った」と農家の山田猛史さんはふり返って苦笑するが、どこかの被害もせいぜいそんな程度だ。村内の道路の損壊は8カ所、公共施設にも大きな被害は出ていない。もともと飯舘村は地盤が固い。

翌12日から、飯舘村は公共施設を避難所として、南相馬市など近隣市町村の津波被災者や原発事故による避難者を受け入れ始める。消防団、婦人会など村民が総出で炊き出しを行なった。燃料や食料などの物資が滞りがちななかでもびくともしない村は、人口約6200人(約1700世帯)ながら、15日には1300人も被災者・避難者を受け入れていた。

その15日の朝6時10分ころ、村から40kmほど離れた東京電力福島第一原発2号機の格納容器が爆発によって破壊され、大量の放射性物質が放出された。目に見えない「放射能雲」は折からの東南東の風に乗って北西方向に向かい、12時間かけて飯舘村付近に滞留・沈

着した(京都大学・今中哲二氏の推定)。夕方から降り始めた雨は、夜半には雪に変わった。

原発事故の深刻な事態が報道されるにつれて、村内に滞在していた被災者・避難者は県西部などに移動を始める。このころには原発への不安から自主的に避難する村民も相次いだ。3月19～21日、飯舘村の村民約2000人が栃木県鹿沼市の体育館に集団避難するが、原発事故が一応「安定」し、大半が3月末までに引き揚げる。それもつかの間、4月11日になって国は年間の積算放射線量のデータを根拠に、「計画的避難区域」を設定する方針を発表、飯舘村民に5月末をめどに避難を要請する。

天災を乗り越えた飯舘村は、電源三法交付金を村としては受けていないにもかかわらず、いつの間にか福島第一原発事故という人災に翻弄され、心ならずも世界から注目されることになった。

家族

「毒ガスの家」と孫に言われて

「放射能が危ないから外に出るな」と言われたでしょう。だから戸を締めきって窓から自衛隊や消防隊

の特殊車輛が走っていくのを見てたのよ」

浜通りに通じる県道沿いの二枚橋地区に住む佐藤洋子さん(60歳)は話す。佐藤博さん(60歳)、洋子さん(59歳)一家は息子夫婦と2世代の専業農家。5棟合わせて約2000㎡の大型ハウスで栽培するイチゴが経営の柱だ。ハウスの地震の被害はなく、3月14日、15日には予定どおりイチゴの苗を定植したが、やがて原発による放射線被ばくの不安が広がっていた。洋子さんがじっと窓の外を見つめていたのはそのころだ。

18日になって、一家は埼玉県の親戚の家に避難する。博さん・洋子さん夫妻は1週間村に舞い戻ったが、息子(36歳)夫妻と小学校2年、幼稚園年中の2人の孫は3月いっぱいまで埼玉で暮らし、4月からは福島市内にアパートを借りて移り住むことになった。親子2代が同居して、野菜専業で暮らしを立てるといふ佐藤家の生活の形は崩れていく。

佐藤さん一家がイチゴの高設栽培を始めたのは7年前の2004年。ハウスが隣接する農家と共同で法人組織をつくった。冷涼な気候を利用し、6～7月のイチゴの

(右ページ) 飯舘地区の高台から見下ろす飯舘村の美しい町並み。この付近で手持ちの放射線量計は4～7マイクローシーベルト/時を示していた(2011年4月26日)